

私立大学研究ブランディング事業 30年度の進捗状況

学校法人番号	13108	学校法人名	國學院大學		
大学名	國學院大學				
事業名	「古事記学」の推進拠点形成—世界と次世代に語り継ぐ「古事記」の先端的研究・教育・発信—				
申請タイプ	タイプB	支援期間	5年	収容定員	8750人
参画組織	全学(文学部・経済学部・法学部・神道文化学部・人間開発学部・研究開発推進機構・教育開発推進機構)				
事業概要	近世国学を継承する本学創立以来の研究蓄積を基盤に、日本文化の根幹である『古事記』の先端的研究を推進する本「古事記学」は、21世紀の『古事記伝』編纂を目指す。即ち『古事記』を人類共通の遺産として位置づけ、日本文化の独自性と普遍性を示すとともに、伝統文化継承の担い手を育成することを目的とする。以て本学が世界と次世代に『古事記』を語り継ぐ独自の拠点となることで、日本文化の新たな創造と発展に寄与する。				
①事業目的	本事業では、國學院大學(以下、本学)において創立以来130年以上にわたり継承されてきた学知に基づく学際的・国際的観点から『古事記』を再定位し、本学独自の「古事記学」の見地による、21世紀の『古事記伝』となる注釈書を編纂して、その研究成果を国内外に発信し、なおかつ教育へと還元するシステムを構築する。そして『古事記』に立脚し日本文化の新たな創造と発展に寄与する世界的な研究拠点となることが目的である。				
②30年度の実施目標及び実施計画	事業全体の中間的総括 <研究> 「中間総括国際シンポジウム」の開催 <教育> 教育実践の試行 <発信> 多様なメディアによる情報発信 ①ポストドク研究員等の雇用(最終年度まで) ②学内定例研究会の実施(最終年度まで) ③『古事記』関連資料の収集とデジタル化(最終年度まで) ④自己点検・評価および外部評価の実施(最終年度まで) ⑤『古事記』関連レファレンス環境の整備(最終年度まで) ⑥本学関連団体と連携した講演等の開催 ⑦『古事記』関連の特集展示 ⑧『古事記』絵画コンテストの開催 ⑨「中間総括国際シンポジウム」(宮崎県)の開催 ⑩外部機関と連携した学際的・国際的ワークショップの開催 ⑪外部機関・企業と連携した各種イベントの開催 ⑫データベースの公開 ⑬『古事記』入門書の刊行 ⑭『古事記』関連アプリの公開 ⑮『こども古事記』試用版のWeb公開 ⑯『こども古事記』による模擬授業の実施 ⑰『古事記』の英訳作成と公開 ⑱成果論集『古事記学』第5号、刊行 ⑲中間評価のための報告書作成				
③30年度の事業成果	<研究実施体制> 前年度と同様の研究実施体制により、平成30年度は客員研究員2名、PD研究員3名、研究補助員1名、臨時雇員3名を雇用した(実施計画①)。 <研究> 過年度から継続し、『古事記』関連資料の収集・整理につとめ(⑤)、公開に向けた調査、デジタル化を進めている(③)。学内定例研究会は全7回開催した(②)。また、中間総括の年にあたり、国際シンポジウム「古事記と「国家」の形成—古代史と考古学の視点から—」を、宮崎県共催、西都市・宮崎県神社庁後援のもと、宮崎県で開催した(⑨⑩)。本学関連団体との連携事業として、人間開発学部と共催し『古事記』の読み語りを行った(⑥)。外部機関と連携した学際的・国際的ワークショップとして、中国・南開大学外国語学院東アジア文化研究センターで、「南開大学外国語学院東アジア文化研究センター学術講演会」を行い、アメリカ・ハーバード大学ライシャワー日本研究所において、「Myth and Ritual in Ancient Japan」を行った(⑩)。 <教育> 教育への還元として、『古事記』の入門書、『古事記の謎をひもとく』を刊行した(⑬)。また、前年度に古事記学センターホームページにおいて公開した地名・氏族データベースを大幅に拡充し、平成30年度は、地名・宮都・陵墓・神社の4つのデータベースを新設した(⑫)。古事記アートコンテストは、次世代に語り継ぐことに焦点をあて、大学生部門のほか、新たに高校生部門を設立し、一般財団法人神道文化会共催のもと行い(⑧⑩)、受賞作品は本学博物館の校史展示室にて展示した(⑦)。				

	<p>〈発信〉 平成30年度の事業成果は、成果論集『古事記学』第5号として平成31年3月に刊行した(18)。また、古事記学センターホームページにおいて、「古事記ビューアー」の『古事記』本文・註釈・英訳などを更新、各種データベースの拡充を行い、本事業の事業成果を概観できるように「成果公開」ページを作成し、公開した(12)(17)。国際シンポジウムにおいては、SNSを活用し、リアルタイムでの情報発信を行った(9)。 また、自己点検・評価および外部評価を実施し(4)、PDCAサイクルを回した。そして、年次報告書を作成し、活動を取りまとめた(19)。</p>
<p>④30年度の自己点検・評価及び外部評価の結果</p>	<p>〈自己点検・評価〉 事業成果から明らかのように、平成30年度は実施計画に基づき事業を推進した。平成29年度における外部評価で課題として指摘された5点については、次のように取り組むことで改善をはかった。 ①グループごとの成果報告 ホームページ上の成果報告ページを改修し、グループごとの成果報告を参照しやすくした。 ②国際シンポジウムのディスカッション公開 司会者がディスカッションをまとめる形式で成果報告論集に掲載するとともに、Twitterでのリアルタイム情報発信を行ったほか、今後ホームページにてダイジェスト映像を公開予定。 ③古事記アートコンテスト社会人部門の創設 「次世代に語り継ぐ」という観点を重視し、高校生部門を創設した。 ④事業成果の教育還元について 前年度に引き続き、本学の共通教育科目として「國學院の学び(古事記を諸分野から読む)」を開講した(後期)。「こども古事記」はホームページでの公開を予定しており、人間開発学部との連携のもと学生等に『こども古事記』の読み聞かせを実践してもらおう。 ⑤データベースの拡充 公開済みの各データベースを更新した。あわせて「地名」「宮都」「陵墓」「神社」のデータベースを新規作成し、公開した。 平成30年度の計画のうち、次の3点は次年度に繰り越しとなった。 ・『古事記』関連アプリの公開 ・『こども古事記』の刊行 ・『こども古事記』を用いた模擬授業の実践 いずれもホームページと連動した計画であり、ホームページ上の準備や改修作業はすでに終えている。次年度はこれらの公開・実施とともに古事記関連画像データベースの拡充を重点的に進める。そして新たに作成したホームページ上の「成果公開」ページを用いた活動成果の発信を行っていくことで、これまで以上に積極的な研究成果の社会還元を行っていく。</p> <p>〈外部評価〉 平成30年度の外部評価委員会において、まず、研究実施体制について、構成員の増員・再配置によりグループ間の人員の偏りが改善された点が評価された。さらに、研究会活動と成果報告論集の刊行にも滞りなく、国際シンポジウムは規模・質ともに十分な国際発信がなされているとの評価を受けた。全体を通して本事業が実施計画にそって適切に展開していると認められたが、①事業成果の教育還元、②データベースの拡充、の2点については課題が指摘された。 ①事業成果の教育還元では、前年度より共通教育科目として開講された古事記学関連授業の取り組みが評価される一方で、大学教育のみならず小・中学校の教育課程へ組み込んでいくことが期待される。 ②データベースの拡充では、データベース上で公開されている情報のさらなる拡充が望まれる。</p>
<p>⑤30年度の補助金の使用状況</p>	<p>平成30年度の補助金については、申請時の事業計画書に基づき、本学に設置した古事記学研究実施委員会にて方針を確認しつつ、古事記学センターによって作成した予算案に従い下記の通り執行した。</p> <p>〈研究費〉 [報酬・謝金]国際シンポジウム講師謝金 [消耗品費]事務用品 [用品費]デジタルカメラ、NAS [機器備品費]パソコン [図書資料費]古事記関連図書 [印刷製本費]成果論集印刷代、ポスター・チラシ印刷代、事業報告書印刷代 [通信運搬費]成果論集発送費、ポスター・チラシ発送費</p> <p>〈広報・普及費〉 [労務委託費]古事記学センターHP作成委託費、シンポジウム映像作成費 [研究旅費]国際シンポジウム・ワークショップ関連旅費</p> <p>〈その他〉 [人件費]客員研究員・PD研究員・研究補助員・臨時雇用(アルバイト)人件費</p>